

## 22. 医療機関での薬物依存症に対する対応の状況について

新井智美、小泉典章、松本清美、雨宮洋子（長野県精神保健福祉センター）

要旨：長野県では薬物依存者とその家族等に対する支援など対策を進めるため、薬物依存症対策推進事業を平成21年度より開始した。初年度は現状と課題を把握するため精神科医療機関、行政の相談窓口、長野ダルクへの実態調査に取組んだ。そのうち精神科医療機関に対して実施した調査の結果から、他の相談機関と比べ薬物の離脱・精神病症状の治療のために、当事者が治療を希望し受診する事例が多いなどの特徴がみられ、県内の精神科医療機関がアルコール以外の薬物依存症に対しても診療を行っている現状を知ることができた。

キーワード：薬物依存症、精神科医療機関、離脱・精神病症状

### A. 目的

薬物依存者とその家族等に対する支援などの対策を進めるため、県内の精神科医療機関における平成18年4月から平成21年9月末までの診療状況及び相談対応について調査・分析し、現状・課題・問題点を明確にする。

### B. 方法

薬物依存診療の有無に関する予備調査実施後、診療状況に関する一次調査、相談者・当事者の状況に関する二次調査を実施した。

【対象】一次調査：薬物依存症の診療を実施している医療機関35機関。二次調査：一次調査機関のうち二次調査協力可能医療機関21機関。

【調査回収期間】平成21年12月～平成22年1月

【調査方法】一次調査はアンケート用紙、二次調査は自記式の調査票を用いて郵送による配布・回収を行った。

【調査内容】一次調査は平成18年4月から平成21年9月末までの間の「診療状況」、「家族相談の受入れ」「二次調査への協力可否」等の10項目、二次調査は同期間に相談対応した全事例の中から選択した事例（1～10例）に関して、「相談の種類」、「初回相談内容」、「薬物に関する状況」等の11項目について1ケースごとに相談票を作成してもらい、ともに郵送による回収を行った。なお倫理面への配慮として相談者本人の特定につながらないよう、個人に関する情報は収集しないこととした。

### C. 結果

#### ①医療機関の状況

県内で調査対象期間内にアルコール以外の薬物依存症の治療を実施した医療機関は北信、中信に多かった（表1）。薬物依存に関する診療体制は18病院のうち2病院は通院対応のみと回答している。初診診療のみと回答した医療機関はなかった（表2）。

表1 薬物依存治療の医療機関数 (箇所)

医療機関	東信	南信	中信	北信	計
病院	3	5	6	4	18
診療所	2	0	5	7	14

表2 薬物依存に関する診療体制 (箇所)

	入院・通院	通院のみ	入院のみ	初診のみ	計
病院	16	2	0	0	18
診療所	0	14	0	0	14

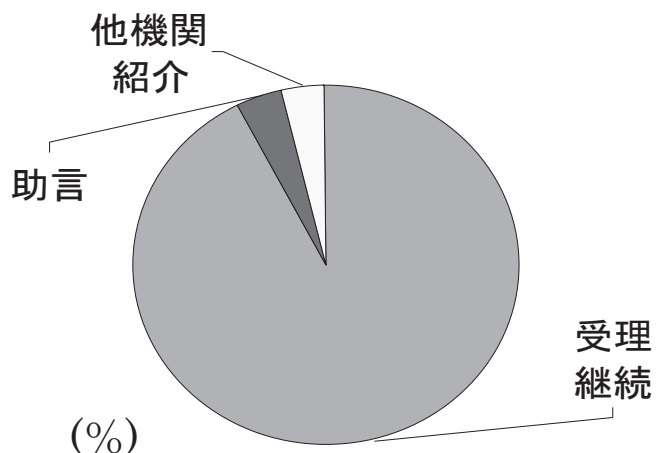
#### ②診療の状況

調査対象期間内に診療を行ったことのある依存薬物の種類は違法薬物が多く、次いで向精神薬などの処方薬、市販薬が多かった。また、診療所でも違法薬物や処方薬、市販薬による離脱症状や精神病症状に対して診療を行っていた（表3）。初診後の対応は、医療機関では約9割が受診継続であった（図1）。

表3 診療を行った依存薬物<複数回答> (箇所)

	違法薬物	処方薬	市販薬	有機溶剤	その他
病院	14	10	9	9	3
診療所	6	9	7	0	2

図1 初診後の対応



## ②相談者の状況

相談者の状況は、医療機関では6割以上が当事者からの相談であった(図2)。初回相談の内容については、治療希望や離脱症状の相談が多かった(図3)。医療機関への相談では、当事者が治療を希望し受診する事例が多くみられることが特徴的な点である。

図2 相談者の状況

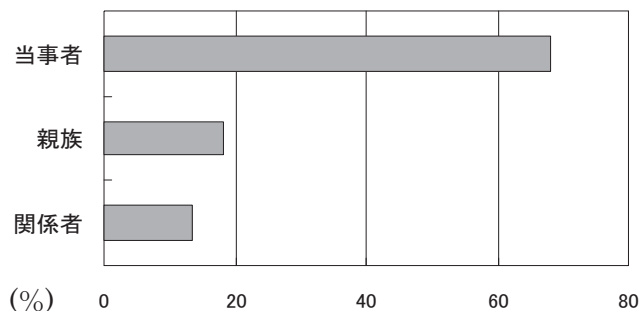
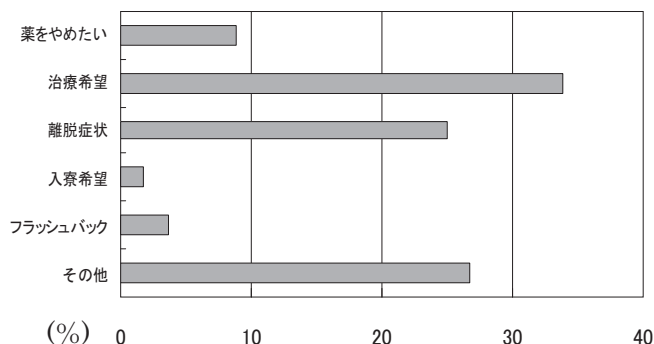


図3 初回相談の主訴(当事者)



## ③当事者の状況

当事者の年齢は30代が多く、20代~40代で全体の8割以上を占めている(図4)。薬物使用の段階は「離脱等の治療」が多かった(図5)。

図4 当事者の年齢

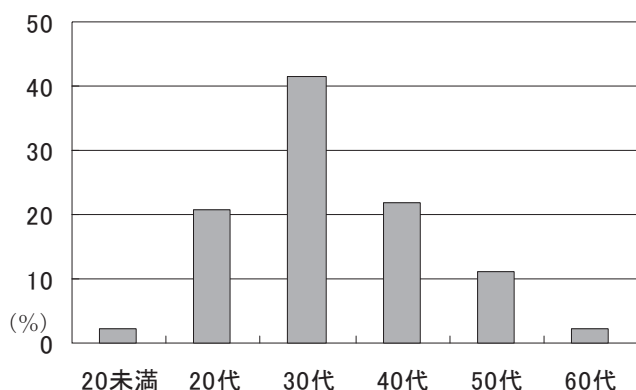
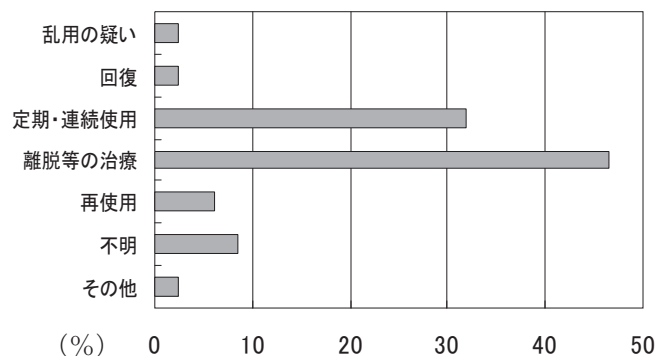


図5 薬物使用の段階



## D. 考察

### ①薬物依存症診療の状況について

薬物依存症の診療を行う医療機関数は地域差が見られたが、診療所でも覚せい剤などを含めた薬物の離脱症状や精神病症状に対して診療を行っており、地域の精神科医療機関が薬物依存への対応を担っている現状が見えた。診療体制においては初診のみに制限する医療機関はなく、その後の受診継続が多いことが特徴であった。

### ②相談者・当事者の状況について

医療機関へは、薬物の離脱・精神病症状の治療を希望し、当事者自らが受診する割合が高く、受診した当事者の年齢は20代から40代で8割以上を占めていることがわかった。

薬物依存症の治療を継続していくことは薬物依存症の回復のために重要であるが、当事者は若い世代が多く経過も長くなることから、初回相談時の治療動機の高さを維持し、治療中断しないよう当事者の状況に応じた治療と支援が必要と考える。

## E. まとめ

今回の調査の結果から、地域の精神科病院や診療所が薬物依存症者の離脱症状や精神病症状に対する治療を担っている現状がわかった。現在県立駒ヶ根病院でも専門医療体制の整備に向けた取り組みが進められており、今回の調査結果を共有して今後の本県の薬物依存症対策推進につなげていきたい。

## F. 参考文献

- (1)長野県衛生部：薬物依存症の相談，連携に関する実態調査報告書（平成21年度）. 2010
- (2)小林桜児，松本俊彦：アルコール・薬物依存臨床ガイド. 金剛出版，2010